■ 通巻第５号

冊子名　蘖-ひこばえ-第３号【テーマ：さかいめ】
発行日　2014（平成 26）年 1 月 1 日
筆者名　杏里、霧谷のあ、篠崎蓮、はしのゆき、野生のペット、祐凪、ゆうや
頁数/発行部数/サイズ　64 頁/30 部/Ａ５版
主な内容　三行詩・文芸詩・俳句・短歌・缶詰・散文・反省文
発想練習　①さいきん～⑳ける
特別企画　『絶望の五七五を七七で救え!!』
印刷所　キンコーズ店頭複合機
装丁　手製本（ホチキスによる中綴じ、特殊紙カラー印刷、トレペ遊び紙）
販売価格　150 円
備考　表紙をはしのゆき氏に委託、特別企画等の企画説明を表紙に記載。
蘖のみテーマ制を導入。新企画として「さきがけの缶詰」（評論）を導入。
役職制度を廃止、奥付住所を馬場正浩から馬場陽子に変更。

レイアウトについて
・64 頁は分厚く、ホチキスが厳しい。→ページを減らすか、オフセットに移行するか。 ・作品の集まりが悪かった。常連は作品のストック等で対策をとること。 ・表紙のデザインが大幅に向上した。分かりやすい。はしのゆきさん、ありがとう。 ・特別企画は七七がついても、五七五の作者が分かるようにしてほしかった。 ・特別企画 31ｐのフォント（行書体）が読みづらい。→プリントアウトしてチェック。 ・散文も右始まりになったし、頁数削減の為にも各コーナーを右始まりにしてはどうか。 ・↑コーナーは左始まりの方がいい。何となく心の整理ができる。（左始まり保持） ・缶詰の字数がバラバラ。→反省文同様、「縦×横」を指定した上で字数制限をする。 ・散文の缶詰が書きづらい。→何かしらの対策を決める。 ・「篠崎蓮」と「霧谷　のあ」といった苗字と名前の間にスペースがあるかないかについて意味があるのか→あります。投稿時点の作者本人がスペースを入れているかいないかに合わせています。 ・篠崎蓮「見えない社会にマシンガンを」の二段目、右詰にしない方がいい。
作品について
●三行詩 ・ゆうや「脱稿か」を始め、全体的に人気。 ・霧谷のあ「こころ」がリズムいい。言葉遊びが上手い。平仮名ばかりでも読みやすい。「シンプルがベスト」が歯が浮く。 ※リズムが決められてる短歌俳句より、三行詩の方が難しい。白紙にリズムを刻むようで。 ●詩

・野生のペット「ふうりん」が良い。「風に聴く・行く・去る」で三段階なのがリズムがいい。最後の「それきり返事はないのです」が 2 回繰り返されてるのが良かった。無駄が無い。最後の段がいい。「それきり返事はないのです」から「それきり返事がないのです」と「は」が「が」に変化するところがいい。風鈴のあったところをじっと見つめる感じ。
・霧谷のあ「テンション曲線上昇中」が読みにくい。狙いすぎている。視覚に訴える表現方法は否定しないが、アクセントとして使えるほどの文章力だと思えなかった。霧谷のあの韻が好きで期待していたので残念。
・霧谷のあ（巻頭詩）のタイトルと本文の関係性が分からない。「影」がテーマかと思ったのに、後半全く出てこない。巻頭詩は表紙も含め、冊子全体の象徴的な存在なのでもっと分かりやすくあってほしかった。
●俳句
・霧谷のあ「湯気立った」人気。美味しそう。楽しみにしてる気持ちが伝わる。
・ゆうやが前回と再び湯布院かぶりしている。同じ湯布院でも印象を変えて欲しい。
・祐凪「ぼた雪を」が人気。ぼた雪×冬牡丹の組み合わせがうまい。季語かぶりが残念。
・祐凪「赤点を」学校の帰り道に言い訳を考えて帰る学生がよく描かれてていい。
・季語かぶり→野生のペット「木枯らしに」ゆうや「秋の夕暮」、注意する。
・ゆうや「新婚うつ」が作り込まれてる。新婚とうつが対極そうなのに一緒になってる。温度差（＝結露）など。
・霧谷のあ「立ち止まり」倒置法がいい。切なさを感じる。
《俳句とは何か？について雑談》
・俳句において主観とは邪魔なものだ。不必要な情報を削って精度を高めていくけれど、写実的になりすぎるとそれはまた違うものだと思う。自分の場合、まず風景をまっさきに思い浮かべそこから自分の感情へと結びつけていく。
・俳句とは写真だ。写真に「楽しい」「嬉しい」「悲しい」「諦め」という言葉は入らない。けれども、例えば墓場を写真に撮ってご機嫌な気持ちを訴える人がいないように、写実性が長けていたとしても、全くの無感情という訳ではない。
●短歌
・野生のペット「託された」が好き！セピア色の自嘲的なイメージ。
　漢字の多い短歌は言葉に酔いがちで中身がない事が多いが、この作品は多い方が伝わる。
・祐凪「校舎から」が好き。ピアニッシモはどこにかかっているのか？
　→初雪が「ピアニッシモよ」と言っている。
・霧谷のあ「守るとか」上の句と下の句でひねりがない。下の句「嘘はつかない君に誓うよ」が綺麗なので、上の句でひねればもっと良かった。「漠然でも」がスッとこない。
・ゆうや「イルミネーション」が五七五に跨って読みづらい。
・祐凪「あどけなき」の「君」は想い人か、卒業した生徒なのか。つぶやきが「飲みこむ」ではなく「流す」と書かれるのが良い。「あどけなき」とは何を指すのか。純情な彼女がビ

ッチになったのか。
《短歌について雑談》
・俳句に比べ、短歌はむしろ感情をむき出しにする作品だと思う。
・上の句と下の句で感情を上下させる必要はない。ストーリー性もいらないのかもしれない。その心を直径３１ミリの穴にすっぽり入るようにスコッといれる感じ。
・篠崎蓮の俳句・短歌は散文テイストで分かりにくい。短いことを生かして。
●桶屋
・経済でネタかぶり。
・霧谷のあ⑮から突然カウントが始まって面白かった。斬新だった。
・桶屋コメントは必ず内容を拾って、ただ感想を書いたりしないこと。
・コメントを読んで本文を読みたくなったのは「杏里」「ゆうや」
　→桶屋コメントは短い為、本文より先に読まれやすい。故にコメントは目立たない程度に、元の作品を活かして面白く書く事が重要。コメントそのものは作品じゃない。
●特別企画
・絶望の五七五「試験前日」はよく拾い上げた、文字通り救済である。
・篠崎蓮「ヘィタクシィー」の勢いが凄い。「タクシー」でも「タクシィ」でもなく「タクシィー」の優雅さ。ものすごくスーツのイメージ。
・「おしり→乾燥→これでオッケー」の破壊力。上手な下ネタ回避。
・「昔はそんなで今はゲイです」の一発逆転。上の句を忘れさせる下の句。
●缶詰
・すっきりしてて良かった。　・自分の感想と違って面白い。新しい発見になる。
・はしのゆき選「いきうめ。」の指摘が意外だった。作者本人でも自覚していなかった。選びにくい作品を敢えて選ぶインパクト。
・耳触りの良い作品ばかり選ぶ必要はない。
※缶詰は作品の優劣を決める場ではなく、作品を通じて作者の心情をどう読み取ったかという「読み取り能力」と、それを読んだ書き手の再発見を積み重ねて、書く力・読む力の向上を目的に設置しています。宣伝目的などといった姿勢にならないで下さい。
・缶詰のネタが尽きるのではないかと心配してる。←書き続ければ良い。
●散文
・「アンハッピーレイン」を読んで気分が悪くなった。これはハッピーエンドなのか？母親微妙じゃないですか？　自分のことを小説に書くとリアルすぎて何も言えなくなる。感想が言いづらい。
・「とある戦いの前夜」が行が増えるごとに人が増えて混乱する。長編の中の一部抜粋をするのではなく、短編小説を書いて欲しい。

その他

《特別企画・桶屋を廃止してはどうか？》
図書館・文学館や、西日本新聞、企業の社長へ渡す等、公式の場へ提出する機会が増えてきた今、一般的に言われる文芸形式を守っているコーナー（詩・俳句・短歌・散文＋缶詰？）以外を廃止し、「さきがけ」「蘖」のどちらかを奇をてらわない真面目冊子にしたいと思う。
・自分らしさが保てていればいいのでは？
・三行詩もそこまで奇をてらうコーナーではないので残していいのでは？
・奇をてらうのは自由な印象を持たせる為だった。作品から自由な印象が消えなければ良い。さきがけ文学会の本質は何なのか、書き手がもっと理解することが大切。